

Contents

\*\*\*\*\*

特集：二合目を迎えた米国2000年選挙	1p
<今週のThe Economistから>	
“China opens up” 「開かれる中国」	7p
<From the Editor> 「感謝祭の思い出」	8p

\*\*\*\*\*

特集：二合目を迎えた米国2000年選挙

米国2000年選挙の投票日まで残り1年を切った。今年春からの長い助走期間を経て、次期大統領候補者はほぼ4人に絞られたようだ。準決勝戦となる両党の候補者選びは、民主党ではゴア副大統領とブラッドレー元上院議員、共和党ではブッシュテキサス州知事とマケイン上院議員の間で行われよう。来年夏の党大会までにそれぞれの勝者が決定し、秋には二人の間で決勝戦が行われる。ただし、この間に第三政党というワイルドカードが波乱を巻き起こす可能性もある。

米国2000年選挙は新しいステージに移った。予備選挙が始まる来年2月までは、上記4人の論戦が関心を集めるだろう。

2000年選挙の3つの意義

米国の2000年選挙には3つの意義がある。

ひとつは当然ながら、21世紀初の合衆国大統領になるのは誰かということである。2期8年にわたって政権を取った民主党は、好調な経済という実績を背景に、新しい大統領をホワイトハウスに送り込みたい。2連敗中の共和党は、拳党一致で支持できる候補者を選び出して、レーガン、ブッシュ以来の政権獲得を目指したい。

最新の世論調査を見ると、もし選挙が今日であればという質問に対し、ブッシュ56%対ゴア40%、あるいはブッシュ55%対ブラッドレー40%となる。<sup>1</sup>

---

<sup>1</sup> CNN / USA today / Gallupの調査による。サンプル数1010、11月18 - 21日実施。誤差4%以内。以下同様。

**次に議会の勢力争いがある。**これが意外と面白い。上院の現状は共和党55、民主党45だから5議席差。上院議員は任期6年なので今回は33議席が改選されるが、うち共和党が19、民主党が14議席を占めている。約半数は無風選挙と見なされているが、民主党の4人、共和党の8人の再選が特に危うくなっているという。共和党がやや不利なのは、今回改選されるのは1994年にギングリッジ旋風に乗って当選した議員が多いから。また、共和党の2人、民主党の3人の現職議員が引退の予定で、空席となる5議席は新人同士の争いとなる。なかでも焦点となるのは、ヒラリー・クリントンが出馬するニューヨーク州選挙区である。

下院の勢力分布は共和党222、民主党212と接近している。任期2年の下院議員は全員が改選になるので、民主党が現状より5～6議席多く取れば、1994年以来の与野党逆転が可能となる。共和党は、先の1998年中間選挙では不倫疑惑による「クリントン叩き」が裏目に出て失速した。しかしその後は支持率を盛り返し、最新世論調査を見ると**有権者の選択は「民主党47%、共和党43%」と接近**している。

ちなみにこの世論調査の通りとなれば、共和党政権と民主党優位の議会が共存することとなり、現状とは攻守が入れ替わることになる。

さて、2000年選挙に懸かっているのは行政と立法だけではない。**司法 = 最高裁の勢力分布が僅差**となっている。現在の最高裁判事は、保守派5人対リベラル派4人の陣容であり、重要な判決が「5対4」で決まることが多い。最高裁判事は終身であり、欠員ができたときに大統領が任命する仕組みになっている。レーガン = ブッシュ時代の12年で「7対2」まで保守派が増えたが、クリントン政権下の8年でリベラル派が巻き返し、いよいよ「あと1人」に迫っている。民主党があと1期政権を維持すれば、最高裁の勢力は逆転しよう。

このように2000年選挙は、行政、立法、司法の三権すべてに逆転の可能性がある。21世紀の米国政治は、文字どおり2000年11月7日に行われる有権者の審判でスタートする。

## ここまでの戦いのポイント

2000年選挙に賭ける共和党の熱意は強く、今年3月から合計11人もの大統領候補者が名乗りを上げた。異常に早いテンポで選挙の準備が始まり、本来であれば2000年2月から始まる予備選挙で候補者同士の競争が行われるべきところ、**すでに有力候補者は絞り込まれてしまった**とあっていい。

これまでにラマー・アレクサンダー・元テネシー州知事（8月16日）、ダン・クエール前副大統領（9月27日）、エリザベス・ドール元労働長官（10月20日）が撤退を宣言。ロバート・スミス上院議員は離党（7月13日）、政治評論家のパット・ブキャナンは第三政党の改革党からの出馬を宣言（10月25日）。さらにゲリー・パウアー元教育次官、オリン・ハッチ上院司法委員長、アラン・キーズ元国連大使などは依然レースに残ってはいるものの、泡沫候補の感をぬぐえない。スティーブ・フォーブス・フォーブス社会長も当選可能性は低い。つまるところ残る2人、ブッシュ対マケインという戦いになるだろう。

他方、民主党はゴア対ブラッドレー2人だけの戦いが、最後までもつれそうな展開だ。

では、これまでの戦いとはいったい何だったのか。世論調査の支持率に一喜一憂していたわりには、政策論争は煮詰まっていない。また、現時点で支持率がいかに高くても、1年後まで維持できるかどうかは分からない。ひとつだけ確実なのは、これだけ長期間の選挙戦を戦い抜くには、膨大な資金を必要とする。ファンドレイジングの結果だけは、候補者を裏切らない。つまり、集めた選挙資金の多寡が最大関心事であった。

極論すれば、これまでの候補者の戦いとは、「選挙資金獲得競争」だった。撤退した候補者は、皆選挙資金不足を理由にしている。反対に、ゴールを1年後に控えて今から「ブッシュ優勢」の声が多いのは、記録的な選挙資金を集めているからである。

有力候補の選挙資金獲得額（連邦選挙委員会発表）<sup>2</sup>

選挙資金報告	Bill Bradley	Al Gore	George W. Bush	John McCain
～4月15日	\$4,331,882.00	\$8,881,977.00	\$7,604,593.00	\$3,772,419.00
～7月15日	\$7,446,343.00	\$8,660,771.00	\$29,685,189.00	\$2,541,914.00
～10月15日	\$7,526,543.00	\$7,335,888.00	\$20,413,179.00	\$3,104,551.00
累計	\$19,274,768.00	\$24,878,636.00	\$57,702,961.00	\$9,418,884.00

これからの戦いのポイント

さて、苦勞して集めた選挙資金は、惜しみなく使わなければ勝利はおぼつかない。ここまでの戦いを一合目とすると、これから予備選挙が始まる来年2月までが二合目となる。これからの勝負は政策論争となるはずである。ゴア対ブラッドレー、ブッシュ対マケインの間で、どのテーマが国民の心を捉えるかの探り合いが始まるだろう。

アイオワ、ニューハンプシャー両州で、実際に予備選挙が始まってからが戦いの三合目である。ここでのポイントは選挙の運動量、つまり時間と資金を効率よく使い、どれだけ汗を流せるかが勝負である。しかし予備選挙プロセスは、形の上では月まで続くものの、大票田が3月7日/14日に開いてしまうので、事実上月中に決着する見込みである。正直なところ、こんなに早く候補者が決まってしまうと、その後の予備選挙が消化試合と化す。1996年の選挙も、早々と「クリントンVSドール」の構図が確定して、選挙は中だるみ状態になった。2000年選挙もそうなる可能性が濃厚だ。

夏が来ると戦いは四合目。夏には党大会が行われる。ここでの興味は 指名受諾スピーチ、副大統領候補の指名、気の利いたスローガン、など。特に副大統領候補は、大統領との間で個性や地域バランスを考える必要がある。両候補者の戦略が問われる。

<sup>2</sup> <http://www.cnn.com/ELECTION/2000/resources/fec.reports/>から作成。なお、表に出ていないフォース候補は、\$20,578,517とマケイン候補の倍の金額を集めていることを付記しておく。

そして9月のレイバーデー（第一月曜日）を過ぎると、戦いはいよいよ本線一気の五合目を迎える。全国規模での選挙戦となるので、**最終段階でカギを握るのはテレビCMなどによるイメージ作戦**である。通常は3回行われる候補者同士のテレビ討論も重要だ。

かくして候補者は、運命の11月7日を迎えるのである。

## 大統領選挙の日程表

予備選挙（2000年2月から6月）= 大統領候補を一本化

- 2月 7日 アイオワ州党員大会（コーカス）
- 2月 8日 ニューハンブシャー予備選挙（プライマリー）
- 2月19日 サウスカロライナ州            2月22日 アリゾナ、ミシガン州
- 2月29日 バージニア、ノースダコタ
- 3月 7日 スーパーチューズデー = 事実上の天王山、11州が一斉に予備選挙を実施<sup>3</sup>。  
（カリフォルニア、コネカット、ジョージア、メイン、マサチューセッツ、ミズーリ、ニューヨーク、オハイオ、ロードアイランド、バーモント）
- 3月10日 コロラド、ユタ
- 3月14日 フロリダ、ミシシッピ、オクラホマ、テネシー、テキサス
- 3月21日 イリノイ、ワイオミング    4月4日 カンザス、ウィスコンシン
- 4月25日 ミネソタ                    4月27日 ペンシルバニア
- 5月 2日 ワシントンDC、インディアナ、ノースカロライナ
- 5月 9日 ネブラスカ、ウエストバージニア
- 5月16日 オレゴン                    5月19日 アラスカ                    5月20日 ケンタッキー
- 5月23日 アーカンソー、アイダホ    5月25日 ネバダ
- 6月 6日 アラバマ、モンタナ、ニュージャージー、ニューメキシコ、オクラホマ、ワシントン
- 未定    ルイジアナ、デラウェア

党全国大会 = 正副大統領コンビ（Ticket）を指名

- 7月29日 8月 4日            共和党（フィラデルフィア）
- 8月14日 8月17日            民主党（ロサンゼルス）
- 9月 4日                    レイバーデー
- 11月 7日                    本選挙 = 大統領選挙人を選出（11月第1月曜日の次の火曜日）
- 12月18日                    選挙人投票 = 各州の州都で実施（12月第2水曜日の次の月曜日）
- 2001年1月 6日                選挙人投票の開票 = 上下両院合同会議で実施
- 2001年1月20日                正副大統領就任式（Inauguration）

---

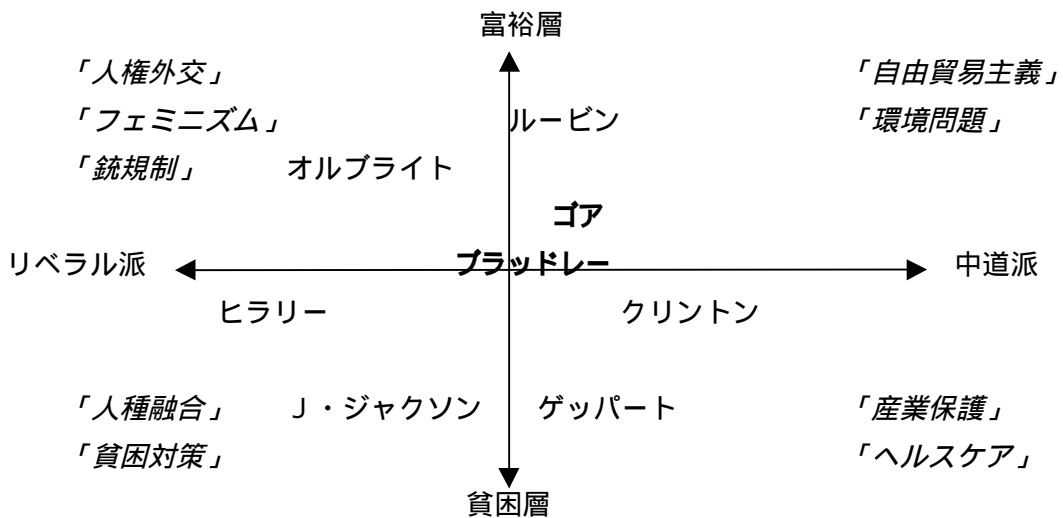
<sup>3</sup> もとは南部諸州が投票日を集中させていた日だが、1996年にカリフォルニアが、2000年にニューヨークが日程を前倒してこの日に合流した。

## 民主党支持者の胸のうち

当面の二合目の戦いで重要なのは、民主・共和両党の支持者の考え方である。党の候補者を決めるのは党员だからだ。まず民主党の情勢を先に見てみよう。

## 民主党政策地図

(©溜池通信)



民主党支持者の考え方は複雑に分かれている。労組、マイノリティ、NGOなどのうるさ型支持母体も多い。これらをひとつにまとめるのは容易ではない。余談ながら、クリントン政権が党内から安定的な支持を得ていたのは、中道派のクリントン&ゴアと、リベラル派のヒラリーがセットで信用されていたからである。

さて、今回の選挙においては、ゴアとブラッドレーはともによく似たタイプである。若く、ハンサムで、スキャンダルがなく、思想的には穏健で自由貿易主義者。ビジネス界の受けも悪くない。両者が政策論争をするのは非常に難しい。

それでも両者はあえて差別化を図らねばならない。ゴアは労組など、民主党支持者のゴア層を抑えにかかるはずだ。上の表でいえば右下部分に歩み寄ることになる。政策的には、やや保護主義的な色彩を帯び始めるかもしれない。また「環境」と「インターネット」は、昔からゴアの得意分野なので、これらを上手にアピールできれば得点は高い。

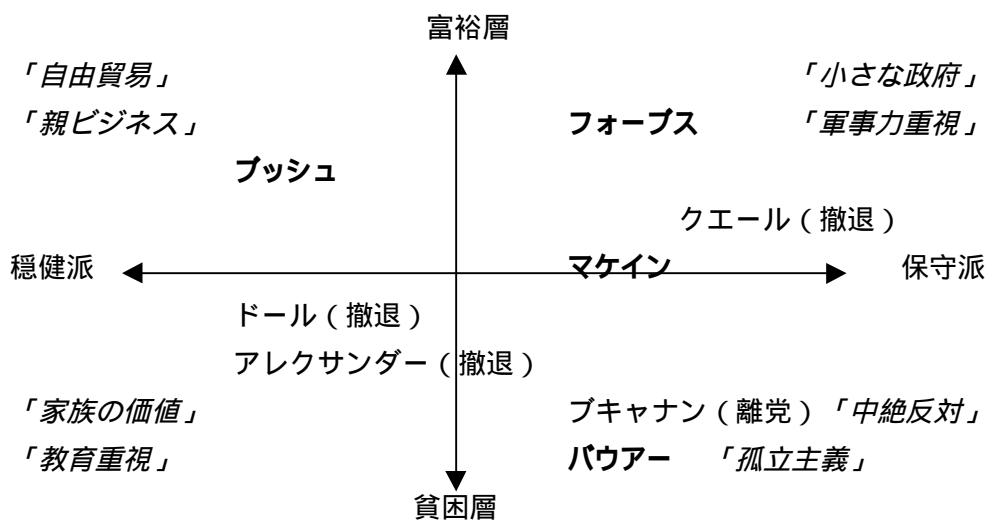
ブラッドレーは貧困や人種問題を強調し、リベラル派(左下)の支持を得ようとするのではない。幸い元プロバスケットボール選手(殿堂入りも果たした名選手)で、マイノリティには昔から人気がある。ブラッドレーのもうひとつの切り札は、米国民の「反中央感情」であり、「クリントン疲れ」ムードである。クリントン政権に飽きた人々の心を引きつければ、大逆転の可能性が見えてくる。

## 共和党支持者の頭の中

共和党は昔はまとまりが良かった。なぜなら「反共」という共通の旗印があったから。冷戦後はそれが効かなくなった。現在の共和党支持者は、民主党と同じくらい込み入った様相を呈している。

## 共和党政策地図

(©溜池通信)



92年、96年と連敗した共和党は、何としても2000年にはホワイトハウスを取り返したい。候補者が乱立気味だったわりには、本選で勝てそうな候補はブッシュしかいないという判断が働き、支持は早くから一本化した。ブッシュの下に記録的な選挙資金が集まったのもそれが原因である。たとえば右下のパウアー候補は宗教的右派に属するが、クリスチャン連合のロバートソン会長はブッシュ支持に傾いているという。

かくして多くの候補が撤退した後では、ブッシュ独走に待ったをかけられそうなのはベトナム戦争の英雄、マケイン上院議員くらいである。国際問題に強いマケインは、コソボ問題でも旗幟鮮明に「介入支持、地上軍投入」の論陣を張って注目を集めた。外交問題で論戦を挑み、ブッシュの不勉強ぶりをあぶりだしたいところだろう。

ブッシュ知事は父親譲りの党内穏健派 "Compassionate Conservatism" (情のある保守主義) が売りもの。スペイン語が話せるのでヒスパニック人口に絶大な人気がある。女性の受けもいい。問題は政策面で、目下外交や安全保障を猛勉強中。ちなみに最近、発表した外交政策では、アジア政策では「反中国、親台湾、日米同盟重視」の姿勢を打ち出した。日本にとっては結構な話だが、これは参謀になったアーミテージ元国防次官補による献策を100%受け売りしている模様である。

さて、共和党で気になるのは、表の下半分の声を代表する候補者がいなくなりそうなことである。金持ち候補だけが生き残り、草の根保守主義の受け皿がなくなるようでは、本選に入ってからややこしいことになる。とくに右下のグループ、「保守的で頑固な白人層」(地域的には南部に多い)の支持を得ることは、ブッシュやマケインにとっては勝利への必須条件となる。

さもなくば、本選に入ってから、たとえば第三政党「改革党」から逆襲を目指すブキャナン候補に、保守票を食われてしまう可能性が出てくる。過去2回の選挙では、改革党からペロー候補が出馬したことが共和党にとっては痛手となっている。3度目のワイルドカードがどんな効果をもたらすかも注目点の一つである。

米国2000年選挙はこれから二合目。民主、共和両党がどんな答えを出すか。その過程で生じた議論が、2000年以後の米国政治で重要な役割を果たすことだろう。

### <今週の“The Economist”から>

“China opens up” November 20th “Cover Story”  
「開かれる中国」(p13-14)

**\*もしも中国のWTO加盟が実現するようなら、その経済のみならず政治もまた変容を迫られることになる。・・・いつも中国に厳しい“The Economist”誌の見方である。**

<要約>

貿易で駄目になった国はない。だが駄目になる政府はあるかもしれない。中国のWTO加盟を認める米中合意から、こんな疑問が浮かんでくる。ほかに、「クリントンは議会を説得できるか?」「中国はWTOのルールを守れるのか?」「市場開放の覚悟はあるのか?」「保守派の巻き返しはないか?」などが気になるが、主要な問題は、WTO加盟で中国共産党の支配が強まるのか弱まるのかである。

全体として、中国が良い方へ変わるだろう。中国政府が約束の半分しか果たせないとしても、これが歴史的な合意であることに変わりはない。中国が提案した自由化は、それほど抜本的な内容であった。中国の貧しい農民は米国のアグリビジネスの脅威にさらされ、国有企業は保護を失う。これらは中国共産党の金城湯池であるにもかかわらず。

なぜ中国はこれだけの犠牲を払うのか。ひとつには改革派が勝利したからだ。江沢民も朱鎔基も、真の意味で自由市場主義者ではない。加盟を求めたのは、それが大国としてふさわしい地位であり、そうした方が外資が得やすいからという現実的な理由があった。共産党としては、国民に繁栄をもたらすことが権力維持の要諦であると計算している。その意味でWTO加盟はギャンブルである。

見合わないギャンブルかもしれない。WTO加盟は法による統治を求める。そうなれば党による決定が危うくなる。党は経済に対する支配力も失う。国有企業の損失拡大や今後

の社会保障のためには新しい税収が必要になる。WTO加盟は、日に日に時代遅れになる中国の政治システムを変えてしまうかもしれないのである。

中国の前向きな変化は、米国の交渉当事者も信じているようだ。米中関係も良くなると信じているだろう。だからといって、中国が国際秩序になじむと思うと間違いになる。中国は成長によって軍備を拡張し、地域覇権を求め、民族主義も高まりを見せるだろう。

米中は「戦略的パートナー」ではなく、当分は「戦略的ライバル」だと考えておくべきだ。それでも中国を国際貿易秩序に取り込むことは、外においておくよりはるかに勝っている。米国は好機に乗じたといえる。

### <From the Editor> 感謝祭の思い出

11月の第3木曜日はボジョレ・ヌーボーの解禁日。では11月最後の木曜日は何の日でしょう？ Thanksgivingこと感謝祭ですね。この日、米国人の家庭では、いとも鷹揚によそ者を家に招き、クランベリーソースのかかった七面鳥とパンプキンパイをご馳走してくれます。筆者は2回、招いてもらったことがあります。いずれも楽しい思い出です。

ひとつはワシントンで。大学出たてで、ロビイスト事務所に勤めているジョンくんの家でした。家に向かう直前、ジョンから急ぎの連絡が入りました。「今日はママの新しいボーイフレンドのビルが来るから、アンディのことは話題にしちゃ駄目だよ」。

そうです、ジョンくんの家は離婚家庭で、その前にお邪魔したときは田舎風の大男、アンディが来ていたんです。ところが当日は、都会風で細身のビルが来ていました。この間、約半年。ジョンのママはとても魅力的な女性でしたし、アンディもビルも楽しい人でしたが、あれからどうなったのでしょうか。何ともアメリカらしいエピソードです。

もうひとつはコネチカット州のさる中流家庭にお邪魔したとき。われながらひどい話ですが、どういう経緯で呼んでもらったのかほとんど思い出せません。覚えているのは、近所に住む80歳近いお年寄りが来ていて、この人が何度も何度も同じことを繰り返すのです。それは「アメリカは駄目になってしまった」ということ。「そんなことはありませんよ、米国経済はからなず復活しますよ」と言ってみたが、老人が言いたかったのはそういうことではなかったらしい。社会全体が墮落している、理想が失われた、といったことを何度も繰り返していました。単なる年寄りの繰り返言かと思ったら、後でご本人は功成り名遂げた方だと聞きました。

あれは1991年秋のことでした。冷戦と湾岸戦争には勝利したものの、経済は不振で失業率は高く、米国全体が自信喪失状態になっていた頃のことです。

あのおじいさんは、今頃どうしているのでしょうか。

最近の米国経済の復活を心から喜んでいる、  
投資信託の成績に一喜一憂している、



ワシントン政治の墮落をあいかわらず嘆いている。

ま、どれでもいいんですけど、おじいさんが今年も元気で七面鳥を食べていたらいいなと思います。

編集者敬白

- 本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、日商岩井株式会社の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

日商岩井株式会社 国際業務部 調査チーム 吉崎達彦 TEL: (03)3588-3105 FAX: (03)3588-4832

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@nisshoiwai.co.jp